

まえがき

世界の様々な地域の橋を概観しますと、橋は多様かつ多彩であると感じます。

橋の目的は人々を此岸から彼岸へと導く道具であるということは間違いないのですが、そこに加えられた付加価値によって利用する人々にとって貴重な存在となり得ているのだと思います。

本書で試みたのは、まずその地域の橋の発展が歴史とどのように関連しあっているかを知るために、橋の歴史的進展を把握することでした。そして、橋の群としてのデザインや景観的な特徴がどのような背景によって生まれたのかを探ることもテーマとなりました。

それぞれの場所における橋の形態やデザインは、設計者の意図のみによって成り立っているわけではなく、歴史的な背景によって制約されているものであると同時に、その空間的背景、すなわち環境にも影響を受けているはずで、それをその地の風土と言い換えることも可能でしょう。

例えば、ロンドンの橋とパリの橋を比べてみますと、デザインや色彩は大きく異なっているように感じます。パリの橋が比較的地味なデザインと色が選ばれているのに対してロンドンの橋は総じて目立つデザインと派手な塗装が施されています。その違いは、河岸に建てられた主要な建築物の様式、デザインに影響を受けているはずで、パリならルーブル宮やノートルダム寺院、ロンドンではロンドン塔や国会議事堂を意識して橋のデザインが選ばれることもあったでしょう。そして、霧の街といわれるロンドンでは橋の存在を強調するために強く目立った色が選択されたのではないかという推論も成り立つかもしれません。つまり、自然環境の違いによって選択されるデザインに違いが出るのではないかとする仮の推論です。しかし、いくつかの橋についてそのような推論が当てはまる場合もあるかも知れませんが、橋梁群として見ますとそのような推論は成り立ちにくいようです。

現在ヨーロッパの主要都市を彩っている橋はほとんどが19世紀以降に架けられたものです。そこに適用されている技術は橋が架けられた時代のものから逸脱したものではない以上、これほどの違いが出てくるのは説明がしづらいでしょう。その違いを説明する言葉として、それこそが「風土」の違いであると思いたるようになりました。

東京の隅田川の橋と大阪の旧淀川の橋を群として見るとどこか違っているように感じます。個々の橋に適用されている技術にほとんど違いはなさそうですので、その背景や環境によって生じているかも知れませんが、それぞれの地域の橋は、たどってきた時間的経過と空間的特徴によって規定され、独自の形態、デザインを生み出してきたと考えられます。

個々の橋について、構造形式やデザイン様式で分類して解説することは可能でしょう。しかし、それらが群として作っている雰囲気のようなものを分析して論理的に説明することは私の手に負えませんので、読者の皆さんにお任せするしかありません。

川に沿って形成された橋梁群の中に新しい橋を建設しようとした場合、担当者は既設の橋とのデザインや色調などとの調和を意識するでしょう。一方、そこに新しい技術なり、デザインを持ち込みたいと考えるのは当然のことです。市民や地域の人々は斬新な変化を求めているでしょう。それは批判と受容の中でやがて定着していき、それも含めて橋の風土を形成していきます。

伝統や風土を打破しようと試みて作り出された物が、いつしか風土と調和していくことが繰り返される中で、歴史的景観が更新されていくことは有りうることです。その土地の人々の鋭意の積み重ねが風土という安定感を育ててきたのではないのでしょうか。

橋の風土とは、その土地の自然条件、すなわち気候、地質、地形などの空間的条件、また民族や時代の政治体制などそれらを取り巻く社会的条件、そして多くの橋が架けられてきた時間的変化、すなわち歴史的条件下から成り立っていると考えられます。それらは渾然一体となって独自の雰囲気醸し出します。それが「橋並み」として具現していると云うことも可能でしょう。

橋並みは、一人の設計者はもちろん、一時代の為政者によって作り出すことは不可能です。橋の景観づくりは設計者の意図が重要であることは言うまでもありませんが、時代的経過の中で作り上げられてきたものは、その地域の人々によって支持され、受容されてきた総意の表象なのではないのでしょうか。

本書をまとめるにあたって、どうしても解けなかった疑問があります。それは、技術やデザインがどのように伝播するのかという問題です。情報伝達が比較的緩やかな時代であっても、優れた技術は技術者の移動などによって伝播してきたことは間違いないさそうです。しかし人や情報の移動が比較的容易であったヨーロッパにおいてもなお、地域ごとに技術やデザインの独自性が保たれているのは、技術伝播論では説明しきれない問題をはらんでいることが指摘できるでしょう。

まして、地勢や民族が複雑なアジアの状態を見ますと、技術伝播論が適用できない事象にぶつかります。本書で取り上げたアンコールの橋、紹興の橋、風雨橋がその例です。

アンコール王朝時代の橋もそうですが、あの壮大な寺院や宮殿の建物にも真のアーチは見当たりません。ヒンズー教や仏教の神々を受け入れて、寺院などが建設されているにもかかわらず、アーチの技術は伝わっていません。インド発祥の文化を受け入れながらアーチの技術はなぜ採用されなかったのでしょうか。また、中国ではアーチの技術はかなり南の方まで伝えられているはずなのですが、インドシナ半島までは南下しなかったようです。

また、紹興の橋で見られるように、多辺形の石橋がアーチ形石橋と併存しているのも謎です。中国における石造アーチの技術は、趙州橋のように7世紀初めにはすでに確立していたにもかかわらず、全国に普及した証拠は見つかっていません。受け入れることができなかった理由があるはずですが、解明するのは難しそうです。

さらに、トン族が生み出した風雨橋という独特のデザインの橋は驚異というほかありません。このような形態の橋がいつ頃から始まったのか、いつ頃確立したのか、その理由と経緯についていくつかの論考がありますが、納得のいく説明はなされていないようです。イラン・エスファハーンの橋の上に何のために二重の壁が設けられたのか、その効用は、などについても十分な説明はなされていないようです。これらは少なくともデザインや技術の伝播論によって説明することはできないでしょう。

このように明快な答えを何一つ提示できないことに歯がゆさを感じていますが、これ以上の愚論は呈しないことにします。本書でお示しした写真なり、拙文の中から「橋並み」の豊かさの一端を感じ取っていただければ幸いです。